

日本の光化学の発展に貢献された片岡さんの思い出

Remembering KATAOKA san contributing to The Japanese Photochemistry Association
for a few decades台湾国立交通大学 理学院 応用化学系 増原宏
Department of Applied Chemistry, National Chiao Tung University
Hiroshi MASUHARA

Mr. Tadataka KATAOKA has passed away on March 2020. He was an owner of one glass company supplying quartz cells, mercury lamps, and other photochemistry-related instruments with high quality. He supported personally foreign students and young Japanese researchers as well as formally many activities of Japanese Photochemistry Association. Some memories on his kind and warm understanding on photochemistry and photochemists in Japan are described and acknowledged.

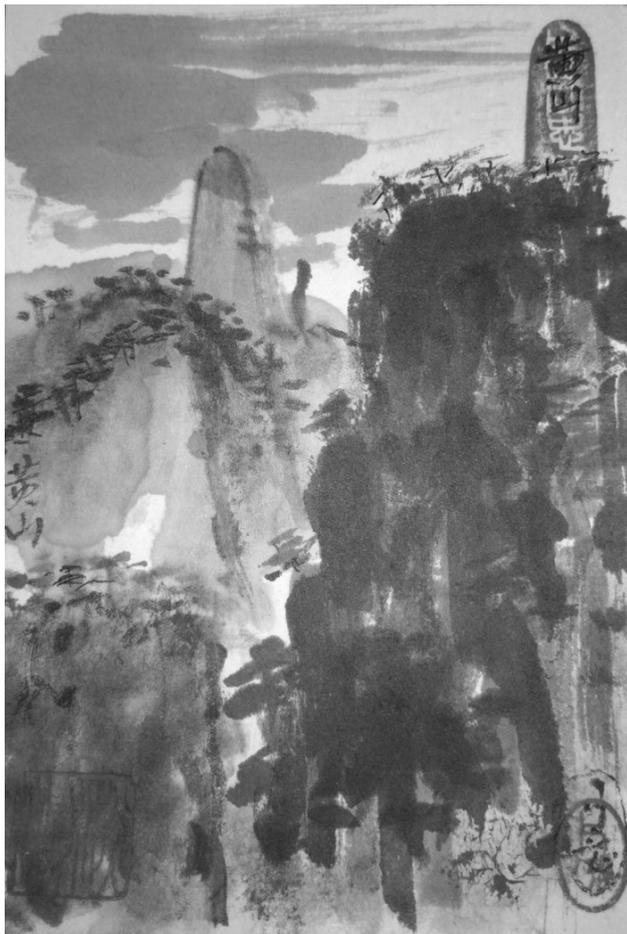
片岡忠孝さんは我々光化学研究者の間では大変有名な大阪の英光社という会社の社長さんです。病氣療養中のところでしたが2020年3月13日にお亡くなりになりました。公私とも大変お世話になりましたが御礼を申し上げることもできなくなり、個人的な思い出を書いてご冥福をお祈りさせていただきます。片岡さんは出入りの業者の域を超えて、若い研究者を強くサポートされていました。何よりも印象的だったのは、中国からの何人もの留学生を個人的に支援されたことです。1970から1980年代に日本の大学には外国人留学生を援助するシステムがほとんどありませんでした。中国人の袁さんという背の高い人が中国は北京の感光化学研究所（現理化学技術研究所）から東京工業大学の田附重夫先生の研究室に留学してきました。田附先生と増原が共同研究していたこともあって知ったのですが、片岡さんが献身的に彼のお世話をしておられました。当時の中国人留学生は日本の観光地や名所を見に行く余裕はなかったのですが、どこかに行きたいなと言うと、季節ごとに片岡さんが何人かを連れて行っておられるようでした。学会に行くと言っても、学生が旅費を工面するのはほとんど不可能でした。それを片岡さんが援助され、「俺が連れて行ってやるわ」、「俺が食べさせてやるわ」と言うような人でした。

片岡さんはファンが全国にいる大阪人でした。元こわもてだったとか、元新聞記者だったとか、いろんな噂がありました。勘の鋭い方で、政治家の秘書も務まるような人だと思ったものです。怒鳴り合ったりするのも結構強そうなので、ヤクザ的と思った大学人もいたのでしょうか。英光社という大阪市にある理化学ガラス屋さんで、奥さんの実家の家業を切り盛りしていると私は理解していました。当時はメールがないので全ての連絡に電話を使っており、注文の確認やお金の請求書の件などで、奥さんから電話がかかってきた時の声を私は今でもはっきり覚えています。「もしもし増原先生ですか、おはようございます。英光社です」から始まる奥さんお声を、私の世代の光化学研究者は昨日のこのように思い出せると思います。

阪大豊中キャンパスの近くの石橋にご自宅がありました。奥さんが大阪市内の会社で経理をして、彼は車で外回りをしておられ、阪大はもちろん京大や京大の熊取原子力実験所によく行っておられました。仕事が終わって家に帰っても奥さんはまだ働いているからしょうがないということで、豊中キャンパスの又賀研究室（後の岡田研究室、現宮坂研究室）に寄っておしゃべりしてから家に帰られます。そのおしゃべりの相手の一人が又賀研の助手をしていた増原でした。彼が袁さんにこうこうしたとか、東工大の誰が何を買ったとか、京大の何先生がどんな装置を購入したとか、そういう話をいっぱいしてくださいました。私が1991年に阪大院工応物に移ってからは、増原研にしばしば寄ってくださいました。彼はその頃ベンツに乗っておられて、阪大応物にしばしば珍しくもベンツが停まっていたわけです。

片岡さんはいろいろなことを言われます。あるとき「年取ったら、人間眠れへんな」と言われます。眠れへんかったらどうするんやと聞くと「ウイスキーを飲むと良い」と言われます。そして「ウイスキーはやっぱいいウイスキーでなければならぬ」と。「いいウイスキーをストレートでくっーと飲むと喉を伝わっていくのがわかる。それを2・3回繰り返すと眠れるようになる」そうです。この話は何回も聞いていたのですが、晩年食道がんになって入院された時に、「若い時からストレートのウイスキーで喉を焼いていたから食道炎になって、食道ガンになったんちゃうか」と言うので、片岡さんは「そんなウイスキーの話はしてへんよ」ということでした。僕の記憶に間違いがないのですが、片岡さんの供養にもなるかと思い、そういう会話があったことをメモしておきます。

片岡さんは研究者の状況描写をよくしておられて、大学教授の誰がだめで、本当に研究ができるのは誰かなど、全部解説して帰られます。一番褒められたのは又賀先生です。片岡さんのように多才な経営者は本当に学問一筋の人が好きになるのかもしれませんが。又賀先生の奥さんが高知県のご出身で、片岡さんも高知県ご出身ですので、高知県



片岡さんは書や絵画にも詳しく、ご自分でも絵を描かれた。
これはいただいたハガキ大の絵の一つである。

の話をして盛り上がりたりしておられました。お子さんのおられない片岡さんは学生や若い助手クラスを自分の子供のように思っておられて、何かあるごとに「今日暇やろう、ご飯食べに行こか」などと言って、豊中・蛍池・石橋境界の店に連れて行って食べさせてくださいました。この経験・記憶は私だけではないと思います。

片岡さんが60歳になった時、仲の良かった光化学研究者の面々が集まって、片岡さんの還暦祝を京都四条の有名な古い中華料理屋さんの東華菜館でやりました。私が京都工繊大の教授だった時ですが、ルーバンカトリック大学のデュライバー教授もその場にいました。たしか光化学討論会の最後の夜だったと思います。片岡さんはプレゼントされた赤いちゃんちゃんこ帽子をかぶっておられました。

(肖像権の関係でお載せできませんが、北大喜多村先生がその時の写真をお持ちです。) そういう経緯もあったので、光化学協会が発足する前から光化学のグループをボランティア的な精神で強くサポートしてくれました。また光化学協会は片岡さんの支援を得て講演賞を創設し、そのひとつを『英光社賞』(JPA Lectureship Award for Asian and

Oceanian Photochemist Sponsored by Eikosha) としてスタートさせました。彼は実にいろんなことをよく知っていて、賞をつくるのにもいろんな条件を出しました。「賞の名前に“英光社”を付けるのはいいけれど、“片岡”という名前を付けてはいけません。そんな根性でやっているのではない。俺はあんたたちが好きでやっていただけだ」ということで、自分が威張ったり、出しやばったりするために光化学を応援しているのではない、とおっしゃっていました。そういったことに関して筋が通った人でした。

ある日、英光社を閉めることにしたと言ってこられました。「もう年だし、それに俺のセルの良いところが分からない研究者ばかりだ。」と片岡流に皮肉を言っておられました。全国の片岡さんが好きな人だけに、「セルでも何でもなんぼでもやるで」とおっしゃっていました。会社は終わったとは言っても、実は彼はまだ自宅に石英を持っていました。それを知っている親しい人達だけが「片岡さん、まだ石英もらえる？」と言うと、「やるわ」とポケットからポイっと出してくれるわけです。貴重なものなのでお金を払おうとすると、「あんた、払われへんで。会社も無いにゃから。小遣いくれるのか」ということを言われる、そういう冗談めかした話ばかりをされる人でした。片岡さんは私より15・6歳上でしょうか。彼は晩年病気になる千里のケアハウスに入っておられました。人間というのは親子だけではなく、基本的に誰かに親切にすると相手はそれを感じます。そして、その親切に見返りを求めないところが片岡さんのすごいところだったと思います。片岡さんは若手光化学研究者に人間教育をして楽しんでおられたのかもしれません。「あの世で一緒にいいウイスキーをぐっとやみましょう！」との想いでこの小文を書きました。



ますはらひろし

台湾・国立交通大学講座教授

略歴： 1966年東北大学理学部化学科卒。1971年大阪大学大学院基礎工学研究科博士課程修了。光化学協会名誉会員、日本化学会賞、ポータメダル、紫綬褒章、瑞宝中授章など。

専門： 光化学、光マニピュレーションの化学